

精神分析学における既視体験再考

川 部 哲 也

I はじめに

既視体験とは「過去との関連がない出来事に遭遇したときに生じる、すべての主観的で不適切な親しみ（懐かしさ）の感情(any subjectively inappropriate impression of familiarity of a present experience with an undefined past)」(Neppe, 1983a)と定義される¹。具体的に換言すれば、初めての場面であるにもかかわらず、「まったく同じことが前にもあった」と思う体験である。既視体験は、デジャ・ヴュ体験(Déjà vu experience)と呼ばれ、一般によく知られている主観的体験である。これまでなされてきた既視体験研究のアプローチ方法は、大きく分けて5種類あると考えられる。すなわち、①主に精神科医による精神病理学的実証研究、②脳神経学的研究、③認知心理学的研究、④精神分析学的研究、⑤超心理学的研究、である(川部, 2001)。川部(2004)では、既視体験が多様な研究領域において、様々な概念と結び付けられてきた歴史を示したが、上記の④精神分析学的研究の知見に関しては、未検討のままであった。本稿は、Freud, S.をはじめとする精神分析理論から見た既視体験について再考するものである。

II 既視体験研究における精神分析学の位置

精神分析学における既視体験研究は、他の領域における既視体験研究と比較して特異な点があると考えられる。以下、体験者の特徴と研究者の特徴に分けて述べる。

1. 体験者の特徴

この領域の研究においては、既視体験の体験者は精神分析を受けに来談した被分析者であるため、既視体験者は何らかの心理的問題を持っていることが前提となっている。また、分析場面において生活史や既視体験の詳細な状況が語られるため、体験者についての個人的情報が把握されていることも大きな特徴である。

2. 研究者の特徴

この領域の研究者は精神分析家であるため、既視体験を解釈する際に、精神分析理論に依拠する点が特徴的である。すなわち、無意識・前意識・意識、あるいは自我・エス・超自我というFreud, S.による局所論モデルを用いて解釈されている。

以上より、他の領域でなされている既視体験研究とは異なる点のある分野であることが見て取れるであろう。精神分析学における既視体験を見ていく際には、これらの点に注意して見ていく必要があると考えられる。Sno & Linszen (1990)は精神分析学について「潜在的な器質的原因が

ない場合は、精神力動的説明が既視体験の原因を最もよく明らかにしてくれる」と述べている。このように、他の領域と異なり、精神分析学は唯一、既視体験の原因の深層心理に踏み込んでいく学問であるといえる。一方、精神分析学の知見に対して否定的な立場もある。Brown (2004) は精神分析学における既視体験研究についてレビューした後に「既視体験における精神分析的視点は、複雑で専門用語だらけの解釈を膨大に生み出した。それらは技術的に込み入っているため、更に議論をする意欲を失わせるものである」(p.125)と主張し、より単純で、より検証可能な視点の必要性を論じている。しかし、精神分析学の独自性を考慮するならば、解釈が複雑であるというだけの理由で精神分析学の知見を否定するのは学問的な態度ではないだろう。歴史的に精神分析理論が緻密に練られてきたものである以上、複雑さは避けることができない。既視体験研究者としては、完全な理解に達することは不可能かもしれないまでも、過去の知見を積み重ねながら、既視体験を地道に理解していくことが望ましい態度ではなかろうか。確かに、精神分析学領域の既視体験研究は難解であるが、他の領域と異なり、体験者についての豊富な情報が記載されているため、非常に示唆に富む既視体験資料が提供されている。更にその知見は、既視体験だけでなく、人間の深層心理一般についても教えてくれるものである。以上のことを踏まえて、精神分析学における既視体験研究について再考することが本稿の目的である。

Ⅲ Freud, S.の既視体験理論の変遷

精神分析学において、既視体験を最初に研究したのは精神分析の祖、Freud, S.である。彼は論文中で、既視体験について何度か言及している。それは1901年の『日常生活の精神病理』、1914年の『精神分析治療中における誤った再認識(「すでに話した」)について』、1937年の『アクロポリスでの記憶障害』の3つである。ここでは、この3論文を概観し、彼の既視体験理論の変遷を検討する。

1. 『日常生活の精神病理』(1901年)

「日常生活の精神病理」(1901)において、Freudは既視体験の事例を初めて分析している。事例(37歳女性):「12歳半のとき、田舎に住んでいる級友たちの家をはじめて訪問した。ところが、その家に入ったとたん、前に一度ここに来たことがあるという感じがした。家の中へ入ったときにもこの感じがくりかえして起こったので、彼女は、次の部屋はどういう部屋か、その部屋からの眺めはどうかなどを前から知っているような気がした。」(Freud, 1901/1970; p.225)

これは、予知できる感じを伴う既視体験事例である。従来、既視体験時に、時として予知できる感じを伴うことが指摘されており(Sno & Linszen, 1990)、既視体験者の33.9%が予知できる感じを伴う既視体験を経験している(Wolfradt, 2000)という報告がある。筆者自身が行った調査においても、予知できる感じを伴う既視体験が報告されたことがあった(川部, 2004)。足立ら(2003)の調査によると、既視体験時に予知できる感じが出現する頻度は、統合失調症患者と対照群との間に有意差が見られなかった。よって、予知できる感じは精神病理の有無に関わらず生じる現象であることがうかがえる。既視体験における「予知」は、当たることあれば、外れることもある。ともかく、少し先の未来がわかる感じがする(相手が次に何を言うかわかるように

感じる、など)ことが特徴である。

ところで、この被分析者が実際に両親に問い合わせると、その家を以前に訪れた可能性は無いことが確認された。Freudが、既視体験が生じた時の事情を被分析者に尋ねてみると、以下のことが明らかになった。

①この訪問をしようと思った頃、被分析者は級友たちのたった一人の兄が重病であることを知っていた。②訪問した際、その兄とも顔を合わせたが、非常に容体が悪そうなので、まもなく亡くなるだろうと思った。③被分析者自身にも一人の兄がおり、数ヶ月前にジフテリアにかかって危うく死ぬところだった。④兄が病気で瀕死になったことを被分析者は忘れていた。

このことから、Freudは、既視体験の背後には抑圧が働いていたのではないかと考察した。被分析者は、級友の家を訪問した際に、「兄が病気で瀕死である」という自分と同じ状況に遭遇した。そこで彼女の意識には「自分の兄も病気で死ぬのではないか」という考えがのぼるはずであったが、その考えは抑圧されたため、意識化されることはなかった。その代わりに、彼女の中にある感情（「兄が死ぬかもしれないと考えたことがある」という気持ち）を、級友の部屋や家へ移動させ、「これらは前に見たことがある」と認識したのである。つまり、過去に「考えたことがある」という事実が、現在の「見たことがある」という認識に置き換えられることによって、既視体験が生じたと考えられる。

この考察を理論化すると、抑圧された無意識的空想が、その空想と類似している外的状況に遭遇することによって、意識化されかかった時に既視体験が生じる、となるだろう。

Freudは更にこの事例を分析し、この既視体験事例における抑圧の性質を明らかにした。この被分析者が抑圧した心的内容は「兄が病気で死ぬのではないか」というものであり、その背後には兄の死を願う気持ち（「兄さえいなければ、自分は一人っ子でいられて、両親の愛を独り占めすることができる」）があったと考えられる。このような、意識に承認されない「兄弟殺し」の無意識的願望が抑圧されていたことが、この既視体験に関わっていると推測される。

2. 【精神分析治療中における誤った再認識（「すでに話した」）について】（1914年）

i. 症例「狼男」

Freud (1914) は、分析中に被分析者が分析家に向かって「これはもう先生にお話したことです」と語ることに論じている。不思議なことに、Freud以後の精神分析学的研究ではこの論文の内容についてほとんど触られていない。しかし、「既に話した (déjà raconté)」という現象は、「このことは一度経験したことがある」という既視体験 (déjà vu experience) と非常によく似ている、と同論文でFreud自身が述べている (Freud, 1914/1983; p.109) ことから、「既に話した」体験の分析も既視体験研究の重要な一つに数えられると考えられる。

その体験とは、ある被分析者が自由連想を行っている間に、「私はそのとき5歳で、庭でナイフを持って遊んでいましたが、そのとき小指を切りました、——いや、小指が切られたと私が思っただけかもしれませんが——でも、これはもう先生にお話しましたね (傍点筆者)」と語ったのである。Freudはその話は聞いたことがないと断言したが、その被分析者は、強硬にその点について自分が間違っているはずはないと主張したという。Freudは、とにかく言い争いは止めに止めて、被分析者が「既に話した」と思っている内容について尋ねた。以下、その内容を引用する。

「私は5歳のとき、庭で子守女のそばで遊んでいました。そして、自分の小刀で、私の夢の中でも一役演じていた、例の胡桃の樹の樹皮を傷つけました。突然私は自分の小指（右手だったか、左手だったか？）がぱっさり切られて、やっと皮だけでつながってぶら下がっているのを見て、言いやうのない驚きに打たれました。痛みは全然感じませんでしたが、大きな不安にとりつかれました。私はわずか2、3歩離れたところにいる子守女にさえ何も話しかけることができませんでした。かたわらのベンチに崩れおちて、もう一度その指に視線を向けてみることもできずじっと坐っていました。やっと落ち着いてきたので、私は指を目にとめて見ますと、どうでしょう、指は少しも傷ついていなかったのです。」(Ibid., pp.111-112)

Freud (1914)によると、この幻覚における小指は「見まごうべくもないペニスの等価物」(Ibid., p.112) であると考えられ、この幻覚内容が去勢不安を色濃く反映するものであることがわかる。この被分析者はいわゆる狼男 (Wolf-man) と呼ばれる症例であり、別論文でFreud (1918) がこの被分析者の幼児期体験全体の脈絡から検討しているが、この幻覚を見た時期が「去勢の現実性を認めるに至った時期と一致する」(Freud, 1918/1983; p.421) と結論している。では、なぜ分析中に「既に話した」体験が生じたのだろうか？Freudの分析によって明らかになったのは、被分析者が5歳時の幻覚を語るずっと以前からこの幻覚について思い浮かんでいたのだが、抵抗のために口に出せないでいたことであった。幻覚内容を語らない代わりに、被分析者は幾度も次のような些細な思い出を語っていた。「いつか伯父が旅行に出かけるとき、私と姉に向かって、何をお土産に持って来てほしいかと訊ねました。姉は本がほしいと言い、私はナイフがほしいと言いました」(Freud, 1914/1983; p.112)。Freud (1914)によると、これは「抑圧された記憶を代表する隠蔽記憶」と考えられる。ナイフの重要性が仄めかされているものの、去勢不安を喚起するような刺激にはなっていないことが見てとれる。

ii. 1901年の理論との比較

狼男の症例において、「既に話した」体験が生じたのは、Freudによってまさに分析が行われている時であるから、被分析者と分析者との転移関係が体験発生に最も大きく影響していると考えられる。特に、年長の男性分析家による分析状況は、被分析者の父親に対する空想が容易に刺激される状況であった可能性が高い。よって、転移状況によって、被分析者の無意識的去勢空想が賦活され、「既に話した」体験が生じるに至ったと考えられる。転移状況を契機とするこの体験例は、外的状況を契機として無意識的空想が意識化されかかると、既視体験が生じるという1901年の理論の延長上に位置づけられると考えることができる。

次に、隠蔽記憶について検討する。狼男の症例では、抑圧された記憶を想起する代わりに、ナイフがほしいと言ったという隠蔽記憶を想起していた。一方、1901年の事例においては、抑圧された記憶（兄が死ぬのではないかと考えたこと）を想起する代わりに、既視体験が生じていた。両事例を考え合わせると、抑圧された記憶が意識から遠い間は、隠蔽記憶によってその内容が意識に入っていないようになっているが、抑圧された記憶が意識化されかかると、隠蔽記憶は機能しなくなり、既視体験あるいは「既に話した」体験が生じると考えられる。すなわち、既視体験は、抑圧を継続させるための防衛の一手段であり、隠蔽記憶が機能しなくなった時の次の防衛機制となりうることが示唆されている。Arlow (1959) も、無意識的内容を抑圧する点で既視体験

と隠蔽記憶の利用は類似していると述べている。

また、1901年の事例では抑圧の背後に「兄弟殺し」の願望が隠れていることが示されたが、狼男の症例の無意識的願望の内容はどのようになっているか検討する。彼が抑圧した心的内容は「私は去勢されるのではないか」というものであったが、Freud (1918) の分析によると、その背後には「2つの相対立する流れが並存」している。すなわち「一方の流れは去勢を嫌い否定しようとし、他の一方の流れはそれを受け入れ、その代償として女性的なものを与えてもらうつもりになった」(Freud, 1918/1983; p.421)。彼が父親から去勢されることを恐れていたことを考え合わせると、前者の流れは、「父親の死を願望せしめるほどに高められた、激しい無意識的な父親に対する敵意とその反応として生じた罪悪感」(Ibid., p.422) が背後に存在していると考えられる。一方、後者の流れは自分が「女性(母親)と同一化することによって彼は、父親に子どもを贈る能力をそなえ」(Ibid., p.418) たいという願望と、「既にそのことを実行しており、もしかしたら今後またそれをやるかもしれない母親に嫉妬」(Ibid., p.418) するという心的内容が背後に存在していると考えられる。このように、狼男の症例における「既に話した」体験の背後にある無意識的願望の内容については、去勢不安が重要性を持つ点は共通しつつも、2通り考えられることが示された。それらは、それぞれ「陽性のエディプス・コンプレックス」と「陰性のエディプス・コンプレックス」と言われているものである。1901年の女性の事例においても兄を亡きものにするという願望は、両親の愛情を独占したいという両親への強い愛着が根底にあると考えられるため、エディプス・コンプレックスが絡んでいた可能性がある。よって、既視体験の背後にある、抑圧された心的内容には、エディプス・コンプレックスが関わっていると考えることができる。1901年には未完成であったエディプス・コンプレックスの理論が1914年には整ってきたため、考察が深化した過程がうかがえる。

3. 「アクロポリスでのある記憶障害」(1937年)

i. 既視体験に対する自我という観点の導入

1914年に既視体験についての理論を提起した23年後、Freudはロマン・ロランに宛てた書簡において、自身が1904年にアクロポリス訪問時に体験した疎隔感(estrangement)について考察しているが、その中で疎隔感に對置させて既視体験について論じている箇所がある。以下にその内容を引用する。

「一方、これら(疎隔感)とは正反対の、いわば肯定的な反応を認めることができる現象、いわゆる『人物誤認』とか『既視感』『既述感』といった現象もありますが、これらは何かあるものを自分の自我の一部と見なしてそれを受け入れようとする錯覚で、疎隔感の場合に何かを自分から締め出そうと努力するのは、ちょうど逆の現象です」(Freud, 1937/1984; p.268)。

ここでまず目を引くのは、既視体験研究史において、自我という概念が初めて登場している点である。Freudは初期の著作から既に自我という概念を使用していたが、自我概念が厳密な精神分析的、技法的意味を持つようになったのは1920年の『快感原則の彼岸』を経てからである。1901年・1914年時点では、自我に未だ厳密な概念が与えられていなかったが、この書簡が書かれた1937年には、自我概念が厳密に理論化されていたため、既視体験理論にも自我概念が導入されたと考えられる。そしてこの書簡以後、精神分析的既視体験研究においては、自我が非常に重

要な概念となっていった。

ii. 既視体験と疎隔との関係

では、この1937年書簡において既視体験はどのような条件下で生じると考えられているのだろうか。Freudが既視体験について書簡中で言及したのは先に引用した一文のみであるから、そこから考えられることを検討するしかない。

Freud (1937) は、既視体験を疎隔感の逆の現象と述べている。この書簡でFreudは「疎隔現象に認められる2つの一般的性格」について論じている。第一は、疎隔はあるものを自我から遠ざけ否定するという防衛であることである。ここで言う「あるもの」は、現実の外界から来る場合と、自我の中に現れる思考や興奮など、内的世界から来る場合があると述べられている。よって、疎隔は現実あるいはエスからの刺激に対する防衛であると考えられる。第二は、疎隔は過去の諸体験に依存していることである。ここで言う「諸体験」は、「古い痛いましい体験」群であり、「その体験をして以来もしかすると抑圧されてしまっているかもしれません」とFreudによって言われているように、過去に抑圧された、意識に承認され難い内容でありうる。よって、疎隔はその内容を防衛していると考えられる。

以上の考察より、疎隔感の逆の現象である既視体験の特徴を挙げてみることができる。第一に、既視体験は現実あるいはエスからの刺激に対する防衛が弱体化した時に生じると考えることができる。第二に、既視体験は過去に抑圧された内容に対する防衛が弱体化した時に生じると考えることができる。いずれにせよここでは、防衛が弱体化した時に既視体験が生じる可能性が示されているといえよう。すると、1901年、1914年で述べられていた、既視体験は抑圧を継続させるための防衛機制でありうるという考えと一貫しなくなる。この理論の相違をどのように考えたら良いのだろうか。1つの考え方の可能性として、疎隔と既視体験とは別種の防衛機制であるという考え方 (Bird, 1957) がある。確かに、疎隔と既視体験とは、自我に襲いかかる刺激に対する防衛機制という意味で根本的に同じ現象であって、現われ方が異なるだけだという仮説もありうる。ここで、この仮説について検討を加える。

Freud (1937) はまた以下のように述べている。「疎隔感には2種類の形式が認められます。すなわち、現実の一部が見知らぬものに見える場合と、自分自身の自我の一部が無縁のものに思われる場合とです。後者の場合『離人症』が問題になります。疎隔感と離人症の間には密接な関係があります」(Freud, 1937/1984; p.268)。このことよりFreudは、疎隔感を①未視体験 (jamais vu; ジャメ・ヴェ) の場合と②離人症の場合とに分けて考えているといえよう。

ここで既視体験と離人症との関係を検討する。昔から既視体験と離人症の関連を指摘する研究は存在した (Heymans, 1904, 1906; Myers & Grant, 1972; Sno & Draaisma, 1993)。精神分析的研究からも Oberndorf (1941) によって、離人症の女性の既視体験事例が報告されている。しかし、質問紙調査による研究において離人症と既視体験には関連が見られないという結果も複数得られている (Brauer et al., 1970; Wolfradt, 2000; Adachi et al., 2003) ため、既視体験研究の歴史全体を概観すると、「現時点では既視体験を離人症の概念と結びつける妥当性は未だ不明であるとしかえない」(川部, 2004) のが現状である。つまり、既視体験全てを離人症と関係があると判断することはできないため、疎隔と既視体験が同じ現象である、という先の仮説は必ずしも成り立たな

いことになる。離人症と緊密に結びつく既視体験の一群が存在する、と控えめに主張することができるだけである。そして、既視体験研究の歴史から見て、離人症と無関係である既視体験の一群もまた存在すると考えられるため、既視体験には複数の種類があると想定することができると考えられる。また、このことより、離人症と関係の強い既視体験と、そうでない既視体験が存在すること自体が、先のFreudの疎隔感の2分類が適切であったことを支持していると考えられることができる。

iii. Freud理論の変遷についてのまとめ

以上Freudによる3論文を概観してきたが、ここで既視体験理論の変遷について概観する。

最初の1901年理論では、抑圧された無意識的空想が、その空想と類似している外的状況に遭遇することによって、意識化されなかった時に既視体験が生じるとされた。また、抑圧された無意識的空想は、意識に承認されないものであることが示された。

1914年理論では、抑圧された無意識的空想によって既視体験が生じるとされる点は1901年理論と同様であり、外的状況だけでなく、転移状況によっても既視体験が生じることが示唆された。既視体験の契機となった去勢不安にはエディプス・コンプレックスが深く関係しているため、既視体験の背後にある無意識的空想にも、エディプス・コンプレックスが関わっていると考えられた。また、既視体験は、抑圧を継続させるための防衛の一手段であり、隠蔽記憶が機能しなくなった時の次の防衛機制となりうることも示唆された。

1937年理論では、自我・エス・超自我という第二局所論によるモデルが導入され、既視体験は自我の働きによるものと考えられた。以前の2つの理論では抑圧された無意識的空想の内容に考察の重点が置かれていたが、この理論では、無意識の内容についてほとんど触れられていない。むしろ重点が置かれているのは自我による防衛機制についてである。そして、既視体験は防衛機制が弱体化した状態において生じる可能性が示されたが、これは1914年理論と矛盾する。しかし、防衛機制としての既視体験と、防衛機制が弱体化した時に生じる既視体験とは種類の異なる体験である、と考えると矛盾しなくなるのではないか。既視体験研究の歴史（川部, 2004）を見ても、既視体験には複数の種類があると想定するのが自然であるように考えられる。Schneck（1961, 1962）も、既視体験の精神力動は多様であり、一つの説明理論で全てを説明することは望ましくないと述べており、この主張を裏づけている。

IV Freud以後の既視体験研究

1. 2種類の既視体験

Freud理論の変遷をたどった結果、防衛機制としての既視体験と防衛機制弱体化時に生じる既視体験の2種類が考えられることが示された。しかし、Freud以後の精神分析学者が取り組んだのはほとんど前者の既視体験のみであった。

Brown（2004）は、防衛機制としての既視体験を「抑圧された記憶」を契機にしている既視体験と、「精神内部の葛藤」を契機にしている既視体験とに更に分類している。これは、Freudが第二局所論によるモデルを導入する前と後にそれぞれ対応すると考えられる。すなわち、1901年・

1914年理論では専ら既視体験の背後にある無意識的願望を探究していたのに対し、1937年理論では、自我・エス・超自我の関係から既視体験を考えているのである。

2. 防衛機制としての既視体験① 無意識的願望についての研究

この立場では、抑圧された無意識的願望が外的状況によって刺激され、意識化されかかった時に防衛機制として、既視体験が生じると考えられている。Pickford (1942a) は、空想形成に対して否定が働いていること、すなわち、願望に対して抑圧が働いていることを既視体験成立の必要条件と考えた。

抑圧された内容についての研究では、Oberndorf (1941) は、既視体験が過去に体験者が恐れた事柄や情動に無意識的につながっていると考えた。Freudと異なり、既視体験の源泉が、体験者が過去に実際に体験したことに求められているのが特徴である。一方、Ferenczi (1912) は、既視体験の源泉を夢の残滓としており、必ずしも既視体験の源泉は実際の体験である必要はないと考えている。

また、文学作品に描かれた既視体験を分析し、抑圧された無意識的願望の性質を探究した研究もある。例えば、Rossettiの詩‘Sudden Light’ (1854)における既視体験には、母親への性愛的な幼児的愛情が背後にあると考えられた (Pickford, 1942b)。また、Tolstoyの「青年時代」(1857)やPloustの「失われた時を求めて」(1913-1927)における既視体験には、母親への依存と父親に対する欲求不満と、成長しつつある男性性の奇妙な結合が背後にあると考えられた (Pickford, 1944)。Hawthorneの「われらが故国」(1863)における既視体験は、エディプス・コンプレックスとそれに関連する幻想が背後にあると考えられた (Zangwill, 1944)。これらはいずれも新しい主張をしているわけではないが、文学作品における既視体験においても、Freudの主張が支持されうることを示すものである。

Freud (1914, 1918) により、既視体験には去勢不安が関係していることが示された。この点について、精神分析事例から確かめた研究もある。Schneck (1961) の被分析者の既視体験は、不安を伴うものであった。分析すると、この被分析者の夢には去勢不安が現れており、既視体験にも去勢不安が関わっていると論じられている。また、Arlow (1959) の被分析者の既視体験事例では、近親相姦の空想が背後にあると解釈され、既視体験にはエディプス・コンプレックスが関係していると論じられている。これも、Freudの理論を裏づける結果となっている。

ところで、Brown (2004) において既視体験とエディプス・コンプレックスとの関連を挙げた研究の例としてSlochower (1970) の論文が挙げられている。この論文では、Freud (1937) のアクロポリスでの体験を分析し、その体験はFreud自身のエディプス・コンプレックスに帰属されるという論を展開しているが、前節で見てきたように、そもそもFreud (1937) の体験は、疎隔体験であって、既視体験ではないため、Slochower論文は既視体験研究の流れとは関係が薄いと考えられる。

3. 防衛機制としての既視体験② 自我・エス・超自我の関係についての研究

この立場では、既視体験を自我による防衛機制であると考えられている。これは前項で挙げた無意識的願望に関する理論とは矛盾するものではなく、心の働きをより構造的に捉えようとした

ものである。

Bergler (1942) は、エスの衝動に対する自我の防衛としての既視体験（エス型の既視体験）と、超自我の叱責に対する自我の防衛としての既視体験（超自我型の既視体験）とに分類した。後者については、外的状況を契機に、過去の不道徳な行いを思い出しなかった時に既視体験が生じた被分析者の事例を挙げ、既視体験は、良心の呵責という超自我の働きに対し、自我が無意識的に防衛したために生じたと考えられた。既視体験の発生を自我と超自我の関係から理論化した点が Freud にはない新しい観点であるといえる。

Arlow (1959) は、第二局所論的観点に基づいた既視体験のモデルを提唱した。このモデルでは、「不安を生起させる記憶・願望・幻想を象徴化し、かつ、刺激するような外的状況に対して、自我のいくつかの防衛機制が複合した結果、既視体験が生じる」とされた。その防衛機制とは、

- ① 不安を生起させる記憶・願望・幻想を「現実ではない」とか「夢のようだ」とか「過去のものだ」とかのように考えて最小化する。
- ② その混乱の源を外的状況に投影あるいは置換する。このようにして、不安の内的要素の重要性を抑圧する。
- ③ 抑圧を維持しようと努力する中、現在の状況が、元々の記憶・幻想の代理として出てくる。
- ④ これらの防衛に、慰めの思考が加えられる。すなわち「心配するな。お前は以前にこのような危機的状況が無事に生き残ったではないか。今それと同じことが起ころうとしているのだ。」という思考が、防衛に加えられる。

という4段階を経ていると考えられた。このように、既視体験が自我の防衛機制の複合の結果であるという観点は、Freudの1937年理論を更に発展させたものであるといえる。

また、Arlow (1959) によると、これらの防衛は完全には成功していないため、既視体験には通常、不安を伴う感覚が生じるとされた。しかし、Brown (2004) はこれを誤りであると述べている。「既視感に伴う主な情動はpositiveかneutralである」という調査結果を得ているからというのがその根拠である。だが、Arlowの論じている既視体験は精神分析の被分析者の体験であるから、体験者の心理状態を考慮するとBrownの論じている既視体験よりもnegativeな感覚が強く現れるのは自然であると考えられる。よって、Arlowの記述を誤りと断じることはできないといえる。一方で、精神分析学的研究において、既視体験に快い感情が伴う事例を挙げた研究もある (Pickford, 1940)。その研究では、無意識的願望を意識化するのが苦しいので、代わりに快い感情が生じた、という素朴な説明が付されているに過ぎない。しかし、これは反動形成という自我の防衛機制を示していると考えられ、既視体験についての新たな理論展開の萌芽が見られる。

4. 防衛機制弱体化時に生じる既視体験

Freudの1937年理論では、防衛機制弱体化時に生じる既視体験が示唆されていた。この種の既視体験に関するその後の研究を概観する。

Fenichel (1945) は、「自我は、抑圧された何かを想起したくない。(それなのに) 意に反して想起されたことから既視感構成されている」と主張した。つまり、自我による防衛が失敗に終わった時に既視体験が生じると考えた。しかし、なぜ防衛の失敗が既視体験を引き起こすのかがこの説明では不明瞭だとする Arlow (1959) の指摘があり、不十分な仮説だとされた。

Marcovitz (1952) は、既視体験を「欲望をより良く満たすために、以前の経験を繰り返したいという願望を錯覚的に充足させるもの」と考え、既視体験は2度目の機会を願う願望充足であると定義した。これは、防衛機制が弱体化し、無意識的願望がそのまま意識化されてしまった結果既視体験が生じるという仮説であるが、複数の研究者から、被分析者の既視体験には、状況の繰り返しを望むという願望は見られないといった批判がなされており (Arlow, 1959; Schneck, 1961, 1962)、仮説の妥当性に疑問が残る。

Federn (1953) によって、一時的に記憶や知覚が自我境界を通過した時に既視体験が生じると述べられている他、Arlow (1959) によって、既視体験においては自我機能が低下しており、防衛が不完全にしか成功していないと指摘されている。

以上より、防衛機制が弱体化した際に既視体験が生じる可能性をFreud (1937) が示唆しているにもかかわらず、この種の既視体験について、精神分析学領域ではほとんど研究されていないのが現状であるといえる。その理由を考えてみると、古典的な精神分析理論においては、防衛機制が弱体化するということは自我が弱体化することを意味し、様々な自我機能の障害が見られることになる。しかし、多くの既視体験においては、現実検討や知覚は正常であり、自我機能に障害があるとはいえない。よって、古典的な精神分析理論の枠組みでは、既視体験を防衛機制弱体化の結果と考えることは困難である。

この理論上の問題を克服するためには、2通りの方向があると考えられる。まず第一の方向は、自我機能が障害を受けることなく、無意識的な心的内容が現れるときに既視体験が生じるという考え方が挙げられる。例えば、Kris (1952) の「自我による自我のための退行 (regression in the service of the ego)」という概念がある。これは、病的な退行ではなく、一時的で部分的な退行であるとされ、自我は無意識から生産的なエネルギーを獲得する、自我のための退行であるとされる。既視体験が生じているときに、そのような退行が起こっていると考えることができる。

第二の方向としては、既視体験を反復夢と同様に考える視点がある (Schneck, 1961, 1962)。その視点とは、①既視体験は反復夢と同様に、根源的な不安を克服しようという試みである、②既視体験は反復夢と同様に、根源的にマゾヒスティックとみなせる、という2つの考え方から成る。Schneck自身はその視点を仄めかせただけで、深められないまま終わってしまっているが、その指摘には大事な示唆が含まれていると筆者は考える。Schneck自身は明記していないが、この記述はFreudの『快感原則の彼岸』(1920)を踏まえたものであろうと考えられ、既視体験を反復強迫として捉える視点が示されていると考えられる。既視体験には「前に体験したことがある」という繰り返しが含まれるため、反復という要素が必ず関係しているといえる。よって、既視体験と反復強迫との関連は、検討する必要があると考えられるが、本稿で扱うテーマの範囲を大きく越えてしまうため、今後の課題としたい。

以上、防衛機制弱体化時に生じる既視体験についての研究の流れを検討した。そこには古典的な精神分析理論の枠組みには入らない考察が含まれることが示唆された。

5. 既視体験の種類提案

Ⅲ節の最後の箇所、防衛機制としての既視体験と、防衛機制弱体化時の既視体験とは、種類が異なる体験なのではないかと筆者は述べた。防衛の有無以外の最も大きな違いは、前者は抑圧

の働きが関係しており、無意識的な内容に対して防衛的であるのに対し、後者は創造や反復強迫など、抑圧よりも深いレベルでの働きが関係しており、無意識的な内容に対して開かれていることであると考えられる。後者の既視体験は前者のそれに比べて、無意識的な内容に対して無防備なままなので、既視体験時のインパクト（強烈さ）や感情は大きいと考えられる。このことから、Neppe (1983b) の分類で言うと、前者は「連想的既視体験 (Associative Déjà vu)」に相当すると考えられる。その特徴は「一般的な人々の平均的な既視体験。… (中略) …一般的にあまり鮮明ではなく、親近感もわずかで、想起されにくい。体験者にとって、言及する価値があると見なされることは稀である。一般的に数秒持続する。感情的・認知的変化は少ししかない、あるいはほとんどない」(p.219) とされる。このようにインパクトが弱められており、すぐに忘却されてしまう体験である点は、精神分析的には防衛が働いた結果と考えることができる。一方後者は、「主観的超常体験の既視体験 (Subjective Paranormal Experience Déjà vu)」に相当すると考えられる。その特徴は「既視体験の一部として、『受容できる主観的超常体験』が存在している。例えば、予知や顕著な親近感、経験的成長、極度な明晰さ、顕著な認知的変化、複数の様式の知覚、環境への意識の高まり、変性した自己意識、通常多幸的であるが調和した感情体験。この種の既視体験は、通常確信を伴い、記述される際は『そう感じられた ('sensed')』と記される」(p.219) とされる。このように、体験のインパクトが強く、感情も非常に大きく、確信を伴う点は、無意識に開かれている様子がうかがえる。「通常多幸的」とされる感情内容については、議論の余地が残されているが、防衛の有無によって、既視体験の種類が異なると考えられることを示した。

V おわりに

本稿では、既視体験研究の中でも特殊な位置を占める精神分析学からの知見について概観し、精神分析学から見た既視体験について再考した。Freud, S.が提起した1901年理論・1914年理論・1937年理論の変遷をたどり、防衛機制としての既視体験と、防衛機制弱体化時に生じる既視体験の2種類があることが示された。その後、それぞれの体験について研究が進められているが、特に後者は、古典的な精神分析理論の枠に収まりきらない理論展開の可能性がある。Kris (1952) の「自我による自我のための退行」の概念との結びつきは、必然的にJungの無意識や創造性についての理論に連結していくものであるし、Freudの反復強迫の概念との結びつきは、死の本能にまで達する理論展開の可能性を秘めている。既視体験を研究するにあたって、理論的に洗練していく方向性ももちろんあるだろうが、何より忘れてはならないのは、これら精神分析学の知見は、心理臨床の現場から生まれた実践の知であることである。既視体験研究は思弁的な傾向を持つきらいがあるが、心理臨床学における研究を行うためには、実際の既視体験の事例に接して、そこから理論を構築していく努力が最も大事と考えられる。

註

- 1 既視体験は19世紀以前に知られていたものではあるが、既視体験を最初に体系的に定義したのがNeppeのものであるため、本稿ではNeppeの定義を採用した。「Neppe (1983a, 1983b) により提唱された定義が、déjà vu研究におけるスタンダードになっている。」(Brown, 2004)

文 献

- Adachi, N., Adachi, T., Kimura, M., Akanuma, N., Takekawa, Y., Kato, M. (2003) : Demographic and psychological features of déjà vu experiences in a nonclinical Japanese population. *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **191**, 242-247.
- 足立卓也・足立直人・武川吉和・赤沼のぞみ・木村通宏・新井平伊 (2003) : 統合失調症患者における既視体験の予備的検討. *精神医学*, **45**(8), 835-839.
- Arlow, J.A. (1959) : The structure of the déjà vu experience. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **7**, 611-631.
- Bergler, E. (1942) : A contribution to the psychoanalysis of déjà vu. *Psychoanalytic Quarterly*, **11**, 165-170.
- Bird, B. (1957) : Feelings of unreality. *The International Journal of Psychoanalysis*, **38**, 256-265.
- Brauer, R., Harrow, M. & Tucker, G. J. (1970) : Depersonalization phenomena in psychiatric patients. *British Journal of Psychiatry*, **117**, 509-515.
- Brown, A.S. (2004) : *The déjà vu experience*. New York; Psychology Press.
- Federn, P. (1953) : Ego psychology and the psychoses. Weiss, E. (Ed) (1977) London, Maresfield Reprints.
- Fenichel, O. (1945) : *The psychoanalytic theory of neurosis*. New York: Norton.
- Ferenczi, S. (1912) : Ein Fall von 'déjà vu'. *Zentralblatt für Psychoanalyse*, **2**, 648.
- Freud, S. (1901) : *Zur Psychopathologie des Alltagslebens*. 池見首次郎・高橋義孝訳 (1970) : 日常生活の精神病理, フロイト著作集4, 人文書院.
- Freud, S. (1914) : Über Fausse Reconnaissance ('déjà raconté') während der psychoanalytischen Arbeit. 小此木啓吾訳 (1983) : 精神分析治療中における誤った再認識 (「すでに話した」) について. フロイト著作集9, 人文書院, pp.108-114.
- Freud, S. (1918) : Aus der Geschichte einer infantilen Neurose. 小此木啓吾訳 (1983) : ある幼児期神経症の病歴より. フロイト著作集9, 人文書院, pp.348-454.
- Freud, S. (1920) : Jenseits des Lustprinzips. 小此木啓吾訳 (1970) : 快感原則の彼岸. フロイト著作集6, 人文書院. pp.150-194.
- Freud, S. (1923) : Das Ich und das Es. 小此木啓吾訳 (1970) : 自我とエス. フロイト著作集6, 人文書院. pp.263-299.
- Freud, S. (1937) : Eine Erinnerungsstörung auf der Akropolis. 佐藤正樹訳 (1984) : アクロポリスでのある記憶障害. フロイト著作集11, 人文書院, pp.262-270.
- Hawthorne, N. (1863) : Our old home. 土田訓康訳 (1999) : われらが故国. 愛知文教大学出版部.
- Heymans, G. (1904) : Eine Enquête über Depersonalisation und 'Fausse Reconnaissance'. *Zeitschrift für Psychologie*, **36**, 321-343.
- Heymans, G. (1906) : Weitere Daten über Depersonalisation und 'Fausse Reconnaissance'. *Zeitschrift für Psychologie*, **43**, 1-17.
- 川部哲也 (2001) : 既視体験研究の視点. 山中康裕監修, 魂と心の知の探求. 創元社, pp.107-113.
- 川部哲也 (2004) : 既視体験研究の歴史. 京都大学大学院教育学研究科紀要, **50**, 399-412.
- Kris, E. (1952) : Psychoanalytic explorations in art. 馬場禮子訳 (1976) : 芸術の精神分析的研究. 岩崎学術出版社.
- Marcovitz, E. (1952) : The meaning of déjà vu. *Psychoanalytic Quarterly*, **21**, 481-489.
- Myers, D. H. & Grant, G. (1972) : A study of depersonalization in students. *British Journal of Psychiatry*, **121**, 59-65.
- Neppe, V.M. (1983a) : The concept of déjà vu. *Parapsychological Journal of South Africa*, **4**, 1-10.
- Neppe, V.M. (1983b) : The Psychology of Déjà vu: Have I Been Here Before? Johannesburg, Witwatersrand University Press.
- Oberndorf, C.P. (1941) : Erroneous recognition. *Psychiatric Quarterly*, **15**, 316-326.
- Pickford, R.W. (1940) : Three related experiences of déjà vu. *Character and Personality*, **9**, 152-159.

- Pickford, R.W. (1942a) : A restricted paramnesia of complex origin. *British Journal of Medical Psychology*, **19**, 186-191.
- Pickford, R.W. (1942b) : Rossetti's 'sudden light' as an experience of déjà vu. *British Journal of Medical Psychology*, **19**, 192-200.
- Pickford, R.W. (1944) : Déjà vu in Proust and Tolstoy. *The International Journal of Psychoanalysis*, **25**, 155-165.
- Proust, M. (1913-1927) : *A la Recherche du Temps Perdu*. 鈴木道彦編訳 (1992) : 失われた時を求めて. 集英社.
- Rossetti, D.G. (1854) : *Collected Works*. London.
- Schneck, J.M. (1961) : A contribution to the analysis of déjà vu. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **132**, 91-93.
- Schneck, J.M. (1962) : The psychodynamics of 'déjà vu'. *Psychoanalysis and the Psychoanalytic Review*, **49**, 48-54.
- Slochower, H. (1970) : Freud's déjà vu on the Acropolis. *Psychoanalytic Quarterly*, **39**, 90-102.
- Sno, H.N. & Draaisma, D. (1993) : An early Dutch study of déjà vu experiences. *Psychological Medicine*, **23**, 17-26.
- Sno, H.N. & Linszen, D.H. (1990) : The déjà vu experience: remembrance of things past?, *American Journal of Psychiatry*, **147**, 1587-1595.
- Tolstoy, L. (1857) : *Youth*. 原卓也訳 (1972) : 青年時代. 新潮文庫.
- Wolfradt, U. (2000) : Déjà vu-Erfahrungen: Theoretische Annahmen und empirische Befunde. *Zeitschrift für Klinische Psychologie, Psychiatrie, und Psychotherapie*, **48**, 359-376.
- Zangwill, O.L. (1944) : A case of paramnesia in Nathaniel Hawthorne. *Character and Personality*, **13**, 246-260.

(博士後期課程 3 回生, 心理臨床学講座)

(受稿2004年 9 月 9 日, 改稿2004年11月19日, 受理2004年11月30日)

Re-consideration on déjà vu experiences in the psychoanalysis.

KAWABE Tetsuya

This report reviews studies on déjà vu experiences in the psychoanalysis which occupies an unique position in the researches, and reconsiders the déjà vu experience from the viewpoint of the psychoanalysis. First, Freud, S. proposed the hypotheses, which are the theory in 1901, the theory in 1914, and the theory in 1937. As a result of consideration on the change of the theories, it is showed the two types of the déjà vu experience. One is the déjà vu experience as the defense mechanism, the other is the experience when the defense mechanism is weakened. The two types may be inconsistent each other, but they are consistent if they are different experiences. Second, it is reviewed the studies after Freud. They mainly studied the unconscious phantasy behind the déjà vu experience, and interpretations by the ego, the id, and the superego. As other possible hypotheses, it is considered that déjà vu experiences are associated with 'regression in the service of the ego(Kris, 1952)', and 'repetition compulsion(Freud, 1920)'. The study in the psychoanalysis has been characterized by the practice knowledge from the field of clinical psychology. The most important thing in the study on déjà vu experiences is theorization from the case studies.